2国彷徨

ソ連人になった日本人の物語①

虚脱感から夜霧の海へ

根

室市図書館に昨年12月、東京に住む女性から1冊の本が贈られた。表題は「ソ連人になった日本人の物語　霧のヴェールの彼方」（新風書房）。1通の手紙が添えられていた。「私の叔父、菊地浩は戦争の色濃い時代に杉並区で生まれ幼少期を過ごしました」

手紙には、その菊地さんの生涯が手短にまとめられていた。終戦後、国内を放浪し、その果てに納沙布岬から1人小舟で海に出て、国後島の沖合で拿捕された―。本は菊地さんが生前書き残した自叙伝を昨年、この女性ら遺族が自費出版したものだった。

菊地さんの物語は1953年の根室から始まる。「汽車が終点の根室に着いたのは、私が自分の影に追われるようにして東北のK町を去ってから3日目の事だった」

菊地さんは根室の駅の売店で買った週刊誌の見出しに、目をとめたという。「○○共産党支部で隠匿武器発見！」。だが、「私の今の運命には何の関係もないこの当時のエピソードのひとつ」と記した。共産党員らが官庁などから追われる「レッドパージ」が吹き荒れた時代だった。前年1月には、札幌市で札幌市警の警部補が射殺された「白鳥事件」が起き、共産党の組織的犯行とされた。

菊地さんは27年（昭和2年）、東京に生まれ軍国主義が台頭する中で育った。18歳で海軍航空隊の予備練習生になったが、7カ月後に敗戦。虚脱感の中、最愛の母の病死も重なり、家を飛び出した。

本にはこう記している。「生まれた時からの国粋教育で、極右翼的に凝結された揚げ句に、その神髄である『天皇』はわれわれと同じ人間であり、『皇国』な国体の本義という架空の布面に描かれた砂上の楼閣にすぎなかったと知らされた」

18歳と多感な年頃だったが、他の若者のように切り替えて「すぐデモ行進の先頭に立って赤旗を振るのは無理だった」。工場労働者、農民、ラーメン店従業員、木賃宿暮らしの日雇い労働者…。国内を8年放浪した末、行き着いた先が日ソの接点、根室だった。

「外国ならどこでも良かった。ソ連が一番近く、運を天に任せて夜霧の海に出た」。53年7月26日、根室の納沙布岬近くにあった小舟を無断で借用し、海に向かって1人こぎ出した。

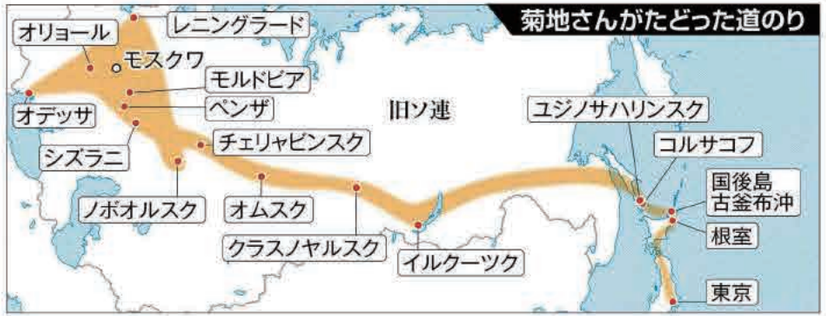
こぎ出したものの、海上では食べ物も飲み水もなく生死の境をさまよった。「くたくたに疲れ切った過去と、黒い壁のような未知との間に凝縮されて、意識の断片が私の最後の夢を乗せた飛行機のように雲の中に消え去っていった」

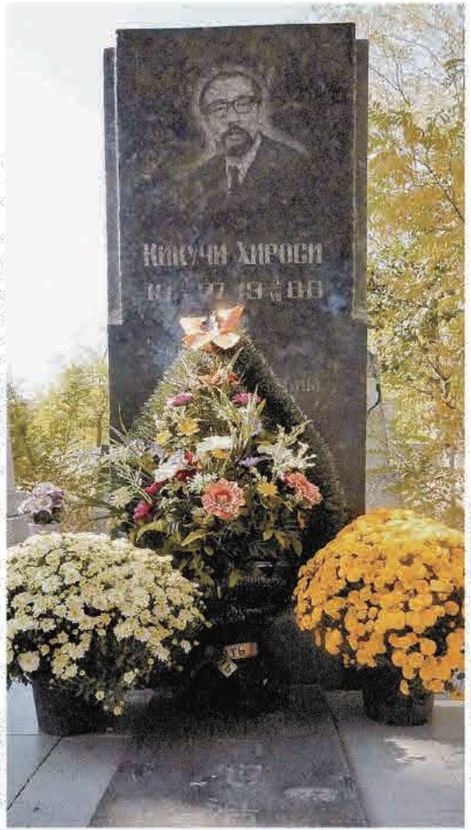
漂流7日目。国後島古釜布の沖合4キロで旧ソ連の監視艇に発見された。乗り込んできた水兵に「わら人形のように軽々と」抱え上げられて収容され、ズック布をかぶせられた。深い眠りに落ちた菊地さんを乗せ、船は島に向かった。

◇　◇

第2次大戦後の冷戦期、人知れず根室から北方領土を経て、旧ソ連に渡った日本人男性がいた。男性は苦難を経て旧ソ連国籍を取得し88年、ウクライナで61歳の生涯を閉じた。戦後70年、領土問題を克服できず平和条約も未締結のままの日ロ両国。彼我の地をさまよい歩いた男性の軌跡は「近くて遠い」隣国を結ぶ。

（モスクワ・渡辺玲男、根室支局・水野薫が担当し、4回連載します）





ウクライナのオデッサから近いベロゴロド・ネストロフスキーに眠る菊地浩さん。墓石には顔が刻まれている＝2014年10月（菊地さん遺族提供）